

2016年7月3日

「見よ、わたしは火をもってお前を練るが、銀としてではない。」 イザヤ48:10

バビロンからの解放（BC538年）が現実的になる中で、問題のある民であっても救いたいのだ、と主は語られます。

彼らは昔から問題のある民であり、今も信用できないのですが、主は「わたしの名のために怒りを抑え…お前を滅ぼさないようにした」と言われます。彼らは「罪赦された罪人」（ルター）です（→40:2）。これから故国へ帰る「第2の出エジプト」の旅が「苦しみの炉」となって、彼らを清めるでしょう。

「地の基を据え…天を延べた」主は、彼らを救うために、特別な手段を用いられます。「主の愛される者」（キュロス王）を選び、「彼を連れて来て、その道を成し遂げさせる」と宣言されます（世界を超越する神！→ヨブ35:5）。

主は預言者を遣わして、「イスラエルの聖なる神」（→レビ11:45「我聖なれば汝らも聖なるべし」）が、「バビロンを出よ、カルデアを逃げ去るがよい」と、アブラハムを召された時のように語られます（→創世記12:1）。今は出発の時です（→バンヤン『天の都をさして』）。

銀の精錬は火で焼き尽くすのですが、「主は私たちが耐えられるかどうかを考えて、限界を越えないようにしてくださる」（カルヴァン）ので、「罪人のかしら」（讃249番）でも大丈夫なのです。

2016年7月10日

「あなたはわたしの僕、イスラエル、あなたによってわたしの輝きは現れる。」 イザヤ49:3

49章からは、故国（シオン）へ帰ってからどうすべきかが語られます。力のない民でも恵みを伝える役目があります。

「主の僕」（→42章）として選ばれた民として、不安があっても（→オリンピック選手！）、「鋭い剣として御手の陰に置き…尖らせた矢として矢筒の中に隠して」くださる主が共におられるので大丈夫です（「山椒は小粒でも」！）。

自分では、「うつろに…力を使い果たした」と反省するのですが、「わたしを裁いてくださるのは主」であり、「主の御目にわたしは重んじられている」ことを知っています。「神が私の従順を認めてくだされば十分」（カルヴァン）なのです（敗者復活戦！）。これから彼らは「イスラエルの残りの者を連れ帰らせる」だけでなく、「国々の光とし…救いを地の果てまで」もたらず仕事を果すでしょう（→『日本中の人々への光』！）。

今は「人に侮られ…支配者らの僕」とされていますが、「主があなたを（勝利者として）選ばれた」のを「王たちは見て立ち上がる」でしょう（スタンディングオベーション！）。そういう「恵みの時」がやがて来ます（→Ⅱコリント6:8）。

力のない者でも、主が「わたしの僕」と呼ばれる時、「主よ終りまで仕えまつらん（讃338番）と、勇気百倍します。

2016年7月17日

「女たちが忘れようとも、わたしがあなたを忘れることは決してない。」 イザヤ49:15

帰還民たちが東西南北からシオンに集まりますが(12節)、そこに住む人々は疑問だらけです。主は答えられます。

50年も廃墟のままなので、「主はわたしを見捨てられた」と考えるのも当然でしょう。しかし主は「女が自分の乳飲み子を忘れるであろうか」、と反論されます。「主は強い愛情を表現するために、ご自分を母親になぞらえることを選ばれるのである(父親よりも!)」。(カルヴァン)

過疎地のようになったエルサレムですが、「あなたを建てる者(帰還民)は速やかに来る」ので、「目を上げて(失望せず!)」見れば、大勢の人々で「花嫁の帯のように」華やかになり、「場所が狭すぎます」と「嬉しい悲鳴」をあげるでしょう。「誰がこの子らを産んでわたしに与えてくれたのか」、それは主です。

その時には、主が「国々に向かって手を上げ」られると、「彼らはあなたの息子たちをふところに抱き…王たちが…彼らの養父となり…あなたにひれ伏し」ます。主は「わたしに望みをおく者は恥を受けることがない」と言い、「あなたを贖うヤコブの力ある者」と宣言されます。

「人は愛されてこそ、生きることが出来る」と言われますが、主の愛に包まれて生きる私たちは、「やすかれ、わが心よ」(讃298番)と歌うことが出来ます。

2016年7月24日

「誰がわたしを訴えるのか、わたしに向かって来るがよい。」 イザヤ50:8

バビロンのイザヤが主の祝福を語る中で(→50:1-3)、それを「ありがた迷惑」と感じる者たちが反抗します。

彼は「主の僕」であり、「弟子としての舌」を与えられて、「朝ごとに…耳を呼び覚」されて語ります。反抗する者たちが迫害しますが、「打とうとする者…ひげ(男の誇り!)を抜こうとする者に…嘲りと唾を受け」ても、それを忍びます(→十字架にかかれる主イエス)。

「主なる神が助けてくださる」ので彼はそれを「嘲りとは思わない」し、「わたしの正しさを認める方は近くに」いてくださいます。民の中にも、「わたしと共に争ってくれる」者もいるので、パウロと同じく「だれが神に選ばれた者を訴え…だれがわたしたちを罪に定めることができますよう」(ローマ8:33,34)と大胆です。敵の方が「衣のように朽ち、しみ(衣魚)に食い尽され」ます。

「主の僕の声に聞き従う者」は「闇の中を歩くときも…主の御名に信頼し」ますが、「自分の光に頼って、自分で燃やす松明(たいまつ)」によって歩む者は「苦悩のうちに横たわる」でしょう。

主の僕として生きようとする者は迫害されます。しかし、「やがては朽つべき人の力」に頼らず、「主の御言葉こそ」(讃267番)と頼る者は幸いです。

2016年7月31日

「主はシオンを慰め…荒れ野をエデンの園とし、荒れ地を主の園とされる。」 イザヤ51:3

預言者は、自分と一緒にシオン（エルサレム）へ帰還しようとする人々に、主の励ましのメッセージを語ります。

主は「わたしに聞け」と語り、「あなたたちが切り出されてきた元の岩…父アブラハム…サラに目を注げ」と言われます。小さな岩ですが、「天の星…海辺の砂」（創22:17）のように多くの民になりました。廃墟になったシオンは、多くの帰還民で溢れるほどになるのです。

主の救いは、「瞬く間に…すべての人の光として輝」き、「（力強い）腕は諸国の民を裁」き、「とこしえに続」きます。ですから、「正しさを知り、わたしの教えを心に置く民」は「人に嘲られることを恐れるな」と、主なる神は励まされます（→藤井圭子『悟りと救い』）。

「奮い立て…力をまとえ…主の御腕よ」と預言者は呼びかけます。「私たちも、主が約束を実行してくださるようにと祈るべきである。」（カルヴァン）「ラハブ（→創1:2「混沌」を象徴する海獣？）を切り裂き…海の底に道を開いて」くださった主が、今の私たちのために力を奮ってくださいと祈り、主はそれに応えられます（51:12-16）。

主は多くの帰還民を起して「シオンを慰め」られます。私たちも「山辺に向かいて」（讚301番）目を上げましょう。